

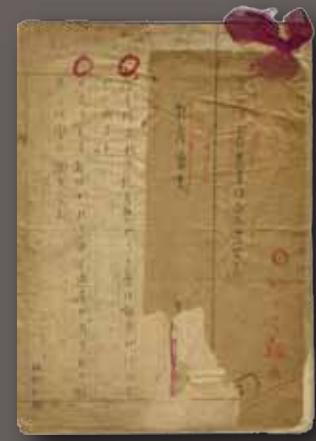
ともに1922年生まれの中井英夫と中城ふみ子。

中城ふみ子は池田亀鑑に中世文学を学び、結婚・出産・離婚や多くの恋を経験し、岡本かの子に憧れ、自身の感性を貫き短歌を詠みました。『短歌研究』1953年12月号で募集された第一回五十首詠で特選に選ばれたことにより大きな注目を集めます。

そこには『短歌研究』の編集者・中井英夫の存在がありました。応募作の中から中城の歌に目を止めた中井は、病床の中城と手紙を交わし歌集出版に向けて突き進みます。中城の第一歌集『乳房喪失』は1954年7月に作品社より刊行されました。

中井は編集者として活躍した後、執筆に専念。1964年に塔晶夫の筆名で小説『虚無への供物』を刊行します。その後も華麗な文体で幻想的な詩・小説・随筆を発表しました。

生誕100年の節目に、歌人の中城ふみ子と編集者・作家・詩人の中井英夫を取り上げ、キーワードから2人の作品世界を辿る展覧会を開催します。



中城ふみ子 五十首詠応募原稿

●中井英夫（1922-1993）

1922年9月17日、東京府下北豊島郡滝野川町大字田端（現・北区田端）に生まれる。東京高師附属小学校（現・筑波大学附属小学校）入学前後から「水少年」「足の裏を舐める男」など怪奇幻想小説というより妄想小説を書く。1941年、一浪のち府立高校（現・都立大学）に入学。1943年、出席日数不足で落第。新任の軍国主義の校長や配属将校と衝突し放校寸前だったが、12月、学徒出陣で入営のため危うく仮卒業となる。1946年、東大文学部言語学科へ復学。第十四次『新思潮』を編集。1949年、東大を中退し日本短歌社に勤務。『短歌研究』『日本短歌』編集長として1955年12月まで在社。1956年に角川書店へ『短歌』編集長として入社（61年に退社）。1962年、「虚無への供物」前半第二章までを書き上げ第八回江戸川乱歩賞へ応募。佐賀潜、戸川昌子の次席となる。1964年2月、塔晶夫の筆名で講談社から『虚無への供物』を刊行。1969年、三一書房から『中井英夫作品集』が刊行される。また同年、『久生十蘭全集』を編集、三一書房より刊行。1976年、角川書店より刊行の『定本・中城ふみ子歌集』を校訂・解題。1993年12月10日金曜日、肝不全により永眠。奇しくも「虚無への供物」の物語が始まる同じ月日、曜日であった。



●中城ふみ子（1922-1954）

1922年11月25日（戸籍上の日付。家族の記録では15日）、野江富美子として北海道河西郡帶広町（現・北海道帯広市）に生まれる。1939年、北海道府立帶広高等女学校を卒業し東京家政学院に入学。在学中、池田亀鑑の授業を受ける。同学院の「さつき短歌会」会員になる。1942年、札幌市にて中城博と結婚（51年に離婚）。1946年、文藝投稿誌「ポプラ」（『ポプラ詩華集』）、北海道新聞函館版文化欄の作品募集コーナーに短歌が掲載される。1947年、短歌結社『新堀』に入社。1951年夫との離婚後、就職のため上京するが体調を崩し帰郷。1952年2月に「左乳腺単純ガン」と診断される。4月6日、左乳房切断手術。1953年に再発転移し54年8月3日永眠。1954年4月、『短歌研究』第一回五十首詠で特選になり、7月に作品社より第一歌集『乳房喪失』を刊行。序文は川端康成が寄せた。

【ギャラリートーク】

「小栗虫太郎、中井英夫、中城ふみ子～本をめぐるあれこれ」

日時：2022年12月14日（水）16時～

会場：小樽文学館展示室 要入館料 申込不要

話し手：本多正一、竹上晶、沢田安史

同時開催

生誕121年

小栗虫太郎展

小栗虫太郎（おぐりむしたろう）は明治34（1901）年、東京神田の酒問屋の家に生まれた。本名・栄次郎。昭和8年、「完全犯罪」で探偵小説家としてデビュー。昭和9年、大作「黒死館殺人事件」を『新青年』に連載。江戸川乱歩をして「世界の探偵文学史上に、あらゆる流派を超越した一つの地位を要求できるであろう」とまで絶賛される。現在でも夢野久作「ドグラ・マグラ」、中井英夫「虚無への供物」とともに三大奇書として畏怖される存在である。他にも「白蟻」「オフェリヤ殺し」「紅殻駱駝の秘密」「魔童子」「二十世紀鉄仮面」など、多彩な作品で独自の文学世界を築いてきた。昨年、小栗が戦時に連載していた新聞小説「亞細亞（アジア）の旗」が発見され、これまでとは違った相貌も確認された。

小栗虫太郎生誕121年目、虫太郎親族、成蹊大学、研究者の協力により、複製資料や作品掲載雑誌類、初版本、『新青年』その他などで、日本探偵小説史上にひとときわ異彩を放つ作家・小栗虫太郎の世界を紹介する。

【朗読会】中井英夫「火星植物園」ほか

日時：2023年1月22日（日）14時～15時

会場：小樽文学館1階研修室 入場無料 定員：50名（申込順）

申込：小樽文学館 電話受付 0134-32-2388

朗読：小樽朗読友の会

市立小樽文学館

〒047-0031 小樽市色内1-9-5 tel.fax. 0134-32-2388

JR北海道「小樽駅」から徒歩約10分・駐車場有

公式Twitterで
最新情報発信中！



JR函館本線		小樽駅	
● 産業会館	● 小樽経済センター	都通り	● サンビルスクエア
● オーセントホテル小樽			
金融資料館（旧日本銀行）			○ 市立小樽文学館
● 郵便局本局			● 小樽芸術村
● 小樽運河			● 旧手宮線